

「道徳の指導法」 についての研究（1）

—道徳的価値の実践の諸相—

大西 勝也

1. はじめに

中学校学習指導要領「道徳」では、「道徳の時間」の目標が、「道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め、道徳的実践力を育成するものとする」(1)と記されている。道徳的実践力を道徳的価値を実践する力と解釈するならば、道徳的価値は「道徳の時間」のキーワードと捉えることができる。自覚と実践を規定するのが、道徳的価値ということである。

さて、道徳とは人間としての生き方にかかわる規範であると同時に、めざすところは実践や行為である。自覚や理論に終始するものではない。道徳的価値の自覚にしても、それは、具体的実践や行為を視野に入れたものである。自覚に際しては、何らかの道徳的価値の実践の様々なモデルが自分の実践や行為に先行して生活現実の中に実在し、そこから、何らかの影響を受けながら道徳的価値を身につけていくというのが人間形成のあり方と思われる。

めざすところが実践であり、自覚に際しても実践がモデルとなるということから、「道徳の時間」の指導では、道徳的価値の実践とはどのようなものなのかしっかりと捉え、整理しておく必要がある。この作業をすることにより、「道徳の時間」でどのような道徳的価値の実践が資料内容となりうるのか、見えてくると考える。

本稿では、人間が生きる日常の生活世界を見渡し、道徳的価値の実践の諸相を捉え、人間が

道徳的諸価値を実践するとはどのようなことなのか考えてみたい。

2. 道徳的価値の実現

(1) 喪失されたときに実感される道徳的価値

人間にとって大切なものは、それをなくしたとき、その存在の重さが実感される。自分にとって大切な人、大切な物、道徳的価値もそうである。それがなくなったときに、それが当たり前にあったときのありがたさがわかる。その分、それがなくなったことへの問題意識、何とかしなくてはという義憤が湧いてくる。

暴走運転をみると交通ルールの大切さが、街頭でタバコのポイ捨てや歩きタバコが目立つと喫煙マナーが、学校で恐喝や暴行が日常的に繰り返されると人権尊重や正義が、戦争で生命が危険にさらされ人間の尊厳が踏みにじられると人権尊重や人間愛が、それぞれ、必要だと実感される。残念ながら、人間において、価値認識は、その喪失や欠乏を契機とすることが多い。

(2) 迷いや葛藤

道徳的価値は、人間の生き方や行為を通して、第三者に認識される。いわゆる「価値の身体化」である。しかし、道徳的価値の実践は、結果に至るまで、その実現を意志する人間の心の内に何の葛藤もなく、いとも簡単に行われるばかりではない。むしろ、多くの場合、道徳的価値の実践に至るまで、いろいろ紆余曲折を経

ているのではなからうか。

例えば、混み合った電車に乗り込んで来た高齢者に座っていた席を譲ろうと思ったとき、一方で、いい格好をする恥ずかしさや照れが心のブレーキとなって働き、もう一方で、高齢者に席を譲らなくてはという良心の声の狭間で葛藤しているうちに、時間ばかり過ぎて、結局、何もできなかったという苦い体験、これは、道徳的価値の実践に向けて取るべき行為がはっきりしているにもかかわらず、心身が一つとなって道徳的価値を体現できない人間の弱さ、未熟さを示している。しかし、こうした弱さを持つのはそんなに深刻なことではない。というのも、これからの精進次第で、道徳意識をうまく行為化(身体化)できる余地が十分あるからである。

それに対して、高齢者が乗車しても何も感じない、席を譲ることすら考えに浮かばないというのは、道徳意識の醸成がなされていないという点で、課題が大きい。比較的人間形成の可塑性が高いと思われる子ども期に道徳意識の育成に向けて、いろいろな角度から働きかけをする必要がある。あたたかい人間関係作りがまず基本であるが、多くの人の支えを感じながら、達成感を味わえる素地の上に、席を譲るなどの道徳的価値の実践の大切さやその理由づけを共に考えるということがなされるのである。

なお、高齢者に席を譲らない言い訳というのもよく聞く。「自分は若者だが、病気だ。疲れている。だれか健康で元気な人が譲ってくれ！」これは、道徳的価値の実践を選択しない、それなりの理由づけである。こうした理由づけをすべて無視するのは、道徳的価値の実践への動機づけを大事に考えるのならば、決して賢明なやり方とはいえない。いろいろな理由づけの声に耳を傾けるおおらかさの中でこそ、自由な発想で本人が納得できる道徳的価値の実践の方策が生み出されるというものである。

(3) 道徳的価値の選択及び実践の方策をめぐる迷いや葛藤

さて、道徳的価値の実践の方策が明確に導き出せないケースがあることも忘れてはならない。そして、道徳的価値の選択においては、複数の道徳的価値がぶつかり合うケース、また、道徳的価値の実現をめぐる行為・方策が真つ向から対立するケースもある。

道徳資料として有名な「けい子のまよい」という道徳の資料がある(2)。その内容は次のようなものである。クラスメイトのけい子は、一緒にいたクラスの友人のひとみが誤ってクラスの花瓶に手が当たり、花瓶の口にひびが入ってしまったことを目撃したが、けい子は気弱なひとみをかばってクラスの他の生徒たちには黙っていた。しかし、その日、けい子が司会する帰りの会で、クラスメイトの一郎が手を上げ、花瓶にひびがあることを指摘し、真実を知ろうとする。けい子が見ると、ひとみは不安な表情を見せている。真実を知っているけい子の心は揺れる。ひとみとの友情のために真実を黙っているべきか、それとも、友情よりも正義を優先し、真実をクラスに公表すべきか、ジレンマに陥ってしまう。(もちろん、このケースを考える際に、正義に反する友情などありえず、真の友情を実践するのならば、けい子はひとみを説得し、ひとみがクラスの仲間に真実を話し、謝罪することを勧めるという行為選択をすれば、ジレンマは一時的なものであり、重大な葛藤・迷いのケースにはなりえないという見解も予想される)。「友情」という道徳的価値(の内容項目)と「正義」という道徳的価値(の内容項目)が対立するというケースである。

次に、道徳的価値の実現に際してとるべき行為・方策の選択肢が正反対のケースで、しかも、どちらが正しいとは明確に結論づけがたいものである。例えば、尊厳死のあり方についてのケースである。これは、内容項目「生命の尊厳を尊重し、かけがえのない自然の生命を尊重する」いわゆる「生命尊重」に当たる。難しい

のは、生命を尊重するということは具体的にはどういふことであるか現実の場面において解釈が分かれる可能性がある。

昨今、人間の寿命が伸びる中で、終末期医療の問題が顕在化してきている。そこには、尊厳死・安楽死の問題が横たわっている。高齢のAさんは、難病の筋肉が萎縮していく不治の病を発症して、自分の意思を示せない状態にある。人工呼吸器をつけて、寝たきりで家族からの呼びかけにも反応はない。以前、少しばかり自分の意思を何とか示すことができた時期に、Aさんは、人工呼吸器を取り外して自然死を迎えさせてもらうよう「尊厳死の宣誓書」を作った。それから年月が経ち、今や、自分の意思を示すことができない心身の状態にいるAさんを安楽死に至らしめるべきか、という問題に直面している。つまり、尊厳死の遂行という意味での安楽死の問題である。その中身は要するに「安楽死は是か非か」という話である。「日本尊厳死協会」が終末期における本人の意思に基づく「尊厳死の宣誓書」に基づく安楽死を可能な選択肢の一つに位置づけるのに対して、「人工呼吸器をつけた子の親の会」では、そうした尊厳死という名の下の安楽死が社会で認知され、広がっていくと、人工呼吸器をつけた子どもたちが「尊厳死→安楽死」という社会的に見えない力にさらされていくという不安があるとして、懸念を示している(3)。つまり、生命尊重とそれにリンクする人間の尊厳尊重という価値の内容項目に関わる方策・行為をめぐって安楽死の是非の問題が生じてくるのである。しかも、その答えはどちらかが正しいという類のものでもない。もちろん、科学が進歩して、誰もが死ぬまで意思の提示が可能となり、苦痛もないという状況が実現されとなれば話は別だが、現実的には当分の間起こりうる問題として存続していくと思われる。これは、本人の意思表示に基づいて安楽死が第三者に委ねられてよいかという問題であるが、脳死や臓器移植についても、脳死が死として社会通念化されつつある今日、

本人や家族がそれを受け入れるか否かについては絶対にこうすべきという指針を道徳的価値の実践として示すことはできない。本人、あるいは、家族が死とは心臓死のことであり、脳死での臓器移植は考えないこととする考え方を、人間愛や隣人愛に欠けた非道徳的態度和非難することはできない。

(4) 道徳的価値選択における決定的失敗

—人間の弱さ—

世の中には、大人・子どもと関わる道徳的価値の選択そのものに失敗する人が少なからずいる。否、小さな失敗なら誰もが心当たりがあるであろう。とりわけ、子ども期に大人に叱責されたり、論されたりして、賢明なる価値選択を心がけるようになった思い出をすぐ回想できよう。とは言え、完成された人間などおらず、つい、思い、言葉、行い、怠りにより、人と人の間を善意を持って心安らかに生きていくことができないでいる自分に気づくことがたびたびある。これは、良心あつての自分のふりかえりと言え。しかし、世の中には、とりかえしの付かない失敗というものがある。薬物中毒、殺人、傷害、虐待、恐喝といった一生取り返しの付かないダメージを与える類のことがらである。その多くは、人間の尊厳を踏みとじる人権侵害の範疇に入る。道徳的価値の選択の決定的失敗は、これから道徳的価値の選択を自覚的に真剣に考える人間に対して教訓を示してくれる。なぜ、そうした失敗に至ったのか、取り巻く状況変化や心理的プロセスをはじめ、諸々の因果関係を、人間の弱さ故に誰にでも起こりうる可能性として知り、回避する心性をもつことが大切である。上述の決定的失敗とは、人間の内に潜む悪しき欲望・趣味が、社会に漂う誘惑・刺激の中で、良心に対して優位に立ち、身体化され、行為として現れる（魔がさした故意ではなかったという過失も含まれる）。人生を決定的に失敗しないために、人間の弱さ故に起こりうる悲劇を教訓として学び、自らの行為を制御するこ

とを覚えることは、誰にとっても必要不可欠である。

(次号に続く)。

註

- (1) 中学校学習指導要領 道徳
第1目標より
- (2) 荒木紀幸：「ジレンマ資料による道徳授業改革」， 明治図書（再版）1991年，
pp.14-16
- (3) 例えば， ニュースウオッチ（NHK総合）
2012年8月23日

大西勝也：神奈川県立人間科学部教授